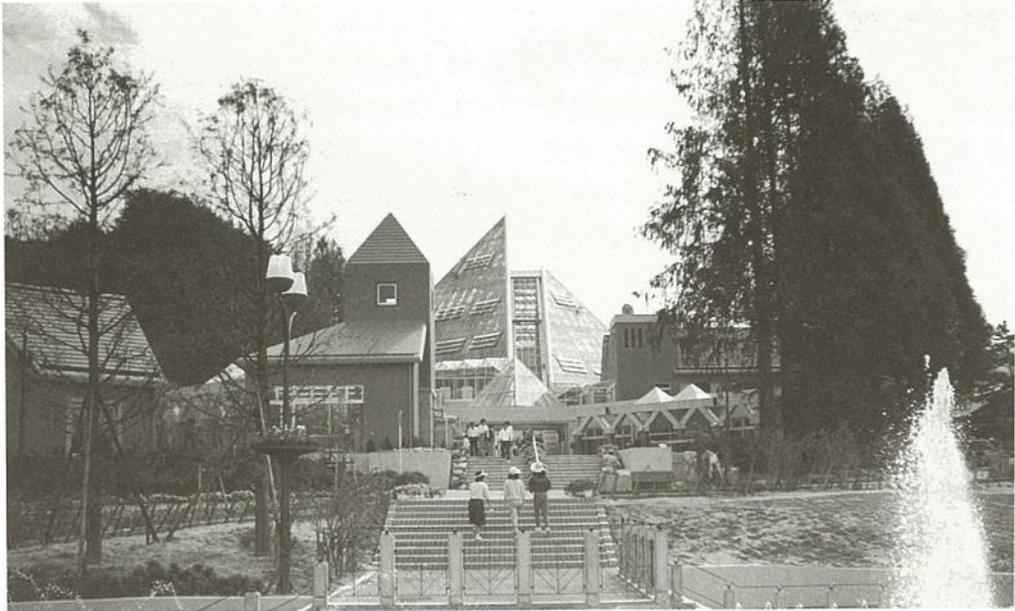


アルパック ニュースレター

地域計画・建築研究所



大阪府立花の文化園（イベント広場と大温室のビスタライン）

アルパック ニュースレター もくじ

特集「都市と田舎」

- ・都市と田舎をめぐる意識のターニング・ポイント…………… 2
- ・「むらおこし」と「まちおこし」が手を結ぶ…………… 4
- ・西ドイツの農村セカンドハウス…………… 6
- ・公営プールの管理あれこれ…………… 8
- ・都市と田舎 —— 二題……………10
- ・花の文化園がオープンしました……………11
- ・第20回地域ゼミ「新たな飛行船の挑戦と可能性について」……12
- ・地方での演劇祭 — 「誰でもお芝居が好きになる
演劇祭」に参加して……………13
- ・まちを見直す —— 上町台地を巡るイベント —— ……14
- ・新刊旧刊書評紹介……………15
- ・まちかど……………16

NO. **44**

都市と田舎をめぐる意識のターニング・ポイント

—— 子供や若者達にみる新たな兆し ——

重本 幸彦

「大きな都市公園」が欲しい地方の若者

10年ほど前、「但馬モデル定住圏計画」の仕事をお手伝いした時、高校生の意識調査を行った。流出が続く若者にどうすれば、地元に残ってもらえるかということを探るのが目的であった。各市町からの若手職員の面々とアンケートの質問を作っている時、一人が整備して欲しい施設の一つとして「大きな公園」を入れることを提案した。但馬地域といえば兵庫県の北部で山々に囲まれた自然一杯のところである。「こんなに自然がたくさんあって、まだ公園が必要ですか。」と私はいぶかった。「若者がデートする場所がない。それに自然といっても眺めるだけで利用できる自然は少ない。」というのがその説明だった。半信半疑だったが、ともかく回答肢にこの提案を加えることになった。

調査結果では、「都市公園（大きな公園）」が、「楽しいショッピング街」とともに、他より抜きん出てトップの回答率だった。

田舎にも都市的魅力を——ということが地方の若者の切実な声であることを痛切に感じさせられた。

高層ビルと自然が共存——都会っ子の理想

その後、大阪府下の新興住宅都市のまちづくり計画をお手伝いした際、子供達の意見も聞こうということで、まちの将来像について、小中学生の絵画と作文の募集を行った。

この時、絵画の部で入賞した絵の一枚には画面の半分が高層ビルで、他の半分には緑一杯の山の上にお寺が描かれていた（写真）。

自然の中に高層ビルは不似合いではないか——少しひっかかった。

ところが、他の市町村での同様の試みによる子供達の描く未来の都市（村）の絵に注意していると、高層ビルが頻繁に登場してくる。それと共に多いのが、観覧車に象徴される遊園地である。お花畑などを含めた緑一杯の中のビルや遊園地のあるまち——これが今の都会の子供達の共通的な理想都市像のようである。

子供や若者は何よりもアメニティ志向

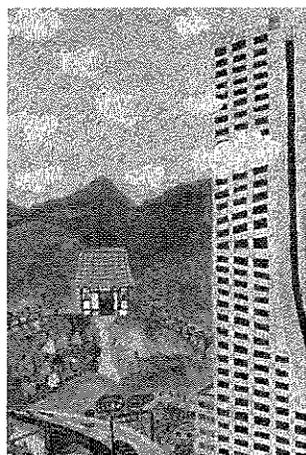
我々の子供時代の未来都市のイメージは、高層ビルディングの林立する科学技術の成果あふれる都市だったが、今は様子が違っているようである。

先日の夜、あるTVのアダルト向けクイズ番組をみていると、桂三枝が「最近の若い女性の結婚相手への希望は、4Hと言われますが、これは何と何でしょう。」とやっていた。答は、以前から言われていた背が高いこと、高学歴、高収入に加えて、高層ビルに住むという4つのハイ（H）だということである。

ここで言う高層ビルは、当然マンションのことで、司会者は「最近地価高騰のおかげで一戸建住宅が望めなくなったから」と解説した。

そうしたこともあるのだろうが、むしろ今の

これが今の子供の理想都市
—高層ビルと緑の共存—



若い女性の中には、高層マンションに快適な暮らしを象徴する魅力を感じている人が多いからではないだろうか。

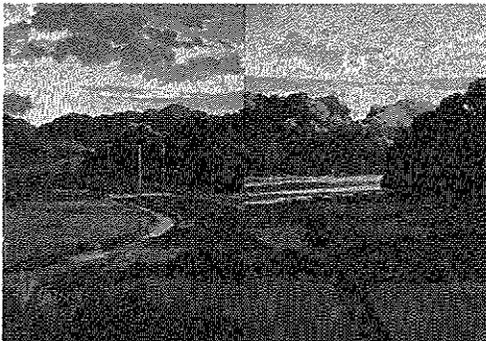
昨今の子供や若者達は、利便さや遊びを含めてアメニティ（快適）志向が強く、そこから、緑一杯の自然であれ、楽しさあふれる遊園地であれ、便利で快適な高層マンションであれ、あるいは都市と田舎についてさえ、アメニティを感じるものとして“同質的”に見ているらしいのである。

子供時代に我々が未来を感じた高層ビルは、暮らしの場ではなく、多分、オフィスビルを主にイメージしていたのではないか。その感覚の延長として、緑一杯の自然と人工物としての超高層ビルとを対立的に考え、今の子供達の絵を矛盾に満ちたものとみてしまったのではないか。

最初に挙げた地方の若者の「大きな公園」志向も、同じように都市的なものにアメニティを感じ、田舎にそうしたものを作ることに何ら矛盾を感じていないのではないだろうか。アメニティ志向の台頭により都市と田舎の対決意識の終焉へ

最近、人気の宮崎駿（はやお）監督のアニメーション映画「となりのトトロ」を見て感嘆したのは、田舎風景の描き方の巧みさだった。黄金の光からうす暗い影の風景へ移り変

アメニティあふれる田舎を描いたアニメーション
（映画「となりのトトロ」から）



わる夕日の中の田園、鎮守の森の大木の神々しさとぶきみさ——実際の体験に裏づけられた田舎の様子を、実写を越える美しさに昇華させていた（写真）。「あんな田舎で暮らしてみたい。森や川で遊んでみたい」……全国の子供を魅了したこのアニメーション映画は、子供のアメニティ志向に訴えて、子供の世界での「田舎の復権宣言」の役割を果たしたのではないか。

子供の世界は大人の世界の反映である。大人達が、公害問題や都市問題へのリアクションがらみで、田舎へのノスタルジアに浸ってTVなどマスコミで自然だ田舎だと騒いでいるうちに、子供達の間には大人のノスタルジアを越えて美化された自然や田舎のイメージが形成され始めているのではないか。

美しいと思ってみると美しく見えるということがある。イメージの現実認識への転化現象だが、手塚治虫などの科学技術的未来都市観で育った世代が結局、そのイメージに似た都市を作っているように、今の子供達や若者の世代がやがては、自然や田舎的魅力にあふれる都市、あるいは都市の魅力やアメニティあふれる田舎を、現実のものとするのではないか。

我々、中年世代以上は都市と田舎とを対立的概念でみてきたが、これからの世代は、アメニティを軸に地域を評価するようになり、アメニティのある空間であれば都市でも田舎でも同質的に評価するのではないだろうか。都市と田舎との社会経済的空間的な違いは、今後とも続くことはまちがいないが、どちらが良いかといった評価意識の差は、急速に縮まるとみられる。

一度、子供達の心の中をのぞいてみてくれませんか。

（大阪事務所 しげもと さちひこ）

「むらおこし」と「まちおこし」が手を結ぶ

高橋光雅

昨年、京都市内の西新道商店街に“むらおこし”がやってきました。京都府商工会連合会が主催する、府内のむらおこし事業で開発された特産品を一堂に集め、都市の商店街を拠点に販路拡大をめざす「むらおこし物産まつり」です。会場となった商店街にはノボリが立ち、法被姿の連合会・商工会・商店街の人達の売り声が飛び交う中、たくさんの買物客で活況を呈しました。この「物産まつり」は11月と12月の各3日間開催されましたが、全国で初めて商店街を会場として行われたという点を除けば、よくみかけるイベント風景と言えます。しかし、この取り組みとそこに至るまでの過程には、「むらおこしとまちおこしが手を結ぶ」ことを提案してきた私と、それを実践しようとしている西新道商店街の役員達の熱い思いが込められていました。

むらおこしの現実

私は、地域調査や市町村の計画づくりの仕事を通じて、京都府内の主として過疎的地域での“地域づくり”の内容を見聞し、地域活性化の一つの柱となっている特産品づくりに大きな関心を持ってきました。

大分県の「一村一品運動」に端を発した地域特産品づくりの動きは、商工会・商工会議所が実施する「むらおこし事業」によって、一気に全国的な広がりを見せてきました。各地で作られた“試作品”は、「ニッポン全国むらおこし展」を始めとする各種のイベント的即時販売会に出展され、主として大都市消費者の前にその姿を現すこととなりますが、ふるさと志向・こだわり志向が言われる今日ですから、百貨店等の大手流通業も見逃すは

ずがありません。数多くの“試作品”の中からプロの目が選択した特産品が商品化され、中元・歳暮ギフトの目玉として売り出されることになった物も少なくありません。しかし、このような流通ルートに乗って販売され、そのため生産量も拡大し、事業として軌道に乗っている特産品や地域は、全国的にみるとほんの一部に過ぎません。圧倒的多数の“試作品”は、物産展向けに少量が作られるだけであったり、あるいは地元観光施設の売場で買われるのをひっそりと待っているというのが現実です。

むらおこし事業で作られる特産品は、商工会員の事業者が新規分野として開発したり農家等の主婦グループの手によるモノがほとんどで、ふるさとの資源を活用した手作りという良さを持っていますが、まだ素人の域を出ていません。そのため、味噌・漬物に代表されるようにどこでも似たり寄ったりのモノが多く、パッケージやネーミング等の工夫が足らず、何よりも生産量が少なく安定供給の体制が出来ていないという状況ですから、大手流通業が相手にできる水準に達していないと

西新道商店街の熱気



言えます。しかし、現地の人達は「売れる見込みがつけば、量も増やせる」と言っており結局のところ流通の壁がモノづくりの量的水準を規定しているように思われます。

がんばってる商店街みつけた

このような水準に止まっている“試作品”が、消費者や流通業者との接触を重ね、モノづくり技術が向上し、事業化への足掛かりがつかないかと考えているところに、ある商工会の視察研修に同行して訪れたのが西新道商店街でした。

京都市中京区の西部、壬生地域の一角に西新道商店街はあります。昭和初期の京都市街地の拡大に伴う人口の定着と中央市場に近いという条件から商店の集積が進み、魚屋や八百屋が立ち並ぶ、今では懐かしさを感じさせる典型的な下町商店街です。お世辞にも綺麗な商店街とは言えませんが、通りには活気がみなぎっています。その秘密は、商店街組合が10年以上かけて取り組んできた事業の内容を聞いて納得させられました。シール・買物券・売出し宣伝を三大事業とし、それに各種の販促イベント、カタログ事業等を結び付けて展開しています。また現在は、シール・買物券をカード化する計画も進んでいます。

ここなら話を聞いてもらえるのではないかと直感した私が、「むらおこしを支援するアンテナショップを商店街につくれませんか。商店街にとっても話題づくりになると思いますが」と話を切り出したのに対して、「ええこっちゃ。やれるように検討しようや」と商店街理事長の言葉が即座に返ってきたのが、今年の正月でした。

アンテナショップ構想

それから、私が紹介した商工会との接触を図ったり——事務局長が商店街を訪れて、ぜひ検討したいと言って帰られたところもあり

ます——有機農業で産直を行っている方から話を聞いたり、下準備が開始されました。商店街では、通りに数軒ある空店舗の活用と結びつけようと、家主さんと交渉し「組合になら貸してもいい」という了解も取りつけてきました。

アンテナショップ自体はそう珍しいものではありません。地域特産品に限っても、古くは北海道池田町を皮きりに、最近では大分県が設立した「大分一村一品(株)」によるアンテナショップは大掛かりなものです。また、大阪府松原市の小売市場では、今年の夏から西日本四大秘境と提携しての「秘境ブランド」特産品の販売を開始しています。

西新道商店街における“構想”は、空店舗を活用して各地の特産品の直売からスタートし、消費者の声を吸収、モノづくりにもフィードバックさせる。定番化した特産品については、商店街内の希望商店でも扱えるようにする。さらにモノの交流だけでなく、消費者と生産地域の人との交流まで発展させ、文字通り「むらおこしとまちおこしが手を結ぶ」ことまで展望しています。商店街ではすでに美山町からの牛乳の共同仕入と、販促イベントの一つとして地域の子供たちを美山町に魚つかみに連れて行くといった実績を積んでおり、この“構想”もまんざら夢ではないといえます。また、アンテナショップでは、特産品の販売だけでなく、現在計画中の情報化事業で導入するオンラインを使った各種のサービス提供まで考えているようです。

昨年、商店街による“アンテナショップ構想”について、商工会連合会の指導員の方に相談したところ、平成元年度から府県連合会が各商工会のむらおこし事業を支援することのできる事業がスタートしたという朗報を聞き、連合会の積極的な協力の下で実現したの

が、冒頭に紹介した「むらおこし物産まつり」です。

“構想”全体からみると、まだその一步を踏み出したところですが、商店街では色々な人達からの応援も得ながら、実現に向かって

確実に事業を積み重ねていかれるだろうと思います。またこの取り組みが、過疎に悩み、地域づくりに努力されている地域の活性化の一つの手掛かりになればと願っています。

(京都事務所 たかはし みつまさ)

西ドイツの農村セカンドハウス

山口 繁雄

「URLAUB AUF DEM BAUERNHOF」とは？

直訳すると、＜農村で休暇を＞というこの言葉は、西独で展開されている農家によるリゾートハウス経営方策を表すものです。

我が国では、大都市住民が農山村にセカンドハウスを持てるよう、1987年に＜都市田園住宅融資制度＞を創設していますが、西独では都市住民にセカンドハウスを建てさせるのではなく、農家に建てさせ、都市住民は必要に応じてそれを利用するという方策を展開しています。その方策が「URLAUB AUF DEM BAUERNHOF」と呼ばれるものです。この農家によるリゾートハウスを、津端修一前広島大学教授は＜農村セカンドハウス＞と呼んでいます。

今秋、アルパックで企画主催した『東西ヨーロッパにおける自由時間政策をさぐる』ツアーに参画して、西独の＜農村セカンドハウス＞を調査する機会に恵まれましたので、そこで見聞したことを含めて御報告します。

西独の農村セカンドハウスの実態

西独では、1960年より上記の＜農村で休暇を＞という政策を推進しており、現在全国で約2万の＜農村セカンドハウス＞が建設されているそうです。

西独の全農家数は、現在約70万戸といわれていますから、＜農村セカンドハウス＞を

経営する農家は、全農家のわずかに3%弱の比率を占めるに過ぎません。

しかし、地域的にいうと、南部のバイエルン州にその約半数が集中しているそうですから、バイエルン州においては相当の比率の農家が＜農村セカンドハウス＞を経営していることになります。

農家の副業として始められた＜農村セカンドハウス＞ですから、西独の中では農業生産力の低いバイエルン州に集中的に立地しているのも頷けます。

ムルナウ村の農村セカンドハウス

今回私共が調査に訪れたのも、バイエルン州の南部にあるムルナウ(Murnau)という人口1万人の小さな田舎町でした。

私共が訪れた農村セカンドハウス経営者の話によると、このムルナウを含むガルミッシュ・パルテンキルヘン地区(人口2.5万人強)内には、＜農村セカンドハウス＞が約120施設あり、ベッド数は約800整備されているそうです。平均すると1施設当たり約7ベッドということになります。西独の政府が定めている標準が、農家1戸当たりの平均経営ベッド数が8ベッドだそうですから、当地区の施設もほぼ標準的な規模になっています。

当地区の＜農村セカンドハウス＞の年間利用日数は、平均約120日/ベッドとなってい

るそうですが、これは全国平均をかなり上回る水準です。＜農村セカンドハウス＞の経営を健全に行うには年間100日／BED以上の利用が必要だそうですから。

＜農村セカンドハウス＞の利用者は、主として北ドイツの大都市住民で、一部にフランス人等の外国人が含まれるそうです。また、最近では、東独の国民が増えてきていると言っていました。

階層としては、ファミリーが中心で、リピーターが50～60%を占めるそうです。また、利用者の滞在日数は平均2週間、長い人は3～6週間滞在するという事です。

美しく魅力的な施設と経営者

私共が訪れた＜農村セカンドハウス＞も、そうした施設の1つでしたが、規模は7部屋プラス3プライベートルームを所有し、ベッド数は12BEDということで、平均よりは大きめの施設でした。

このセカンドハウスは、農家の経営によるものですから、農家の敷地内に建設されているのが一般的です。我々が訪れた農家も、敷地の入口の部分に母家と並んで建てられました。

このセカンドハウスが、実にきれいなのです。それもその筈です。西独では、西ドイツ

セカンドハウスの花小窓



農業協会（Deutsche Landwirtschafts Gesellschaft略称DLG）が中心になって＜農村セカンドハウス＞の施設と経営マニュアルを作成し、指導を徹底しているからです。施設が美しく管理がしっかりしているのもうなづけます。窓辺という窓辺には美しい花が飾られます。とても民宿とは思えません。我が国でいえば、かなりデザインに凝ったペンションのようなものと思っただけであればイメージが合うかもしれません。

この施設に対して、上記のDLGでは、定期的に検査を行い、検査をパスした施設には「DLGマーク」を与えています。

西独の＜農村セカンドハウス＞は、その殆どを農家の主婦が経営します。主婦がセカンドハウス経営に習熟し、なかなか堂に入っているのです。しかも、とても農家の主婦とは思えないくらいチャームポイントなのです。

私共の訪問したセカンドハウスも、年輩の主婦と若い嫁とで経営していましたが、いずれもチャームポイントで、我が国の「民宿」のように、野暮ったい“おじさん”が料理を運んでくるイメージは全くありませんでした。

私は、この姿を見て、西独の農政の凄さを感じましたが、皆様はいかがでしょうか。

（京都事務所長 やまぐち しげお）

検査をパスした認定のマーク



チャームポイントは笑顔



公営プールの管理あれこれ

～太陽が丘プールの例～

山田 泰造

はじめに

太陽が丘には年間100万人の入園者があり、半分が運動施設を利用、また半分がレクリエーションのため来園、そのうち約20万人がファミリープールを利用します。今年の夏は記録的な暑さで、職員や関係者の労苦は大変なものであったと頭のさがる思いがします。今回は、プールの事故について管理する者として経験したことを主として二、三ふれましょう。

水死事故の状況

最近5年間は大体700～800人（行方不明者を含む）程度です。うち、水死事故の97%が自然環境の水面で発生しており、プールでの事故死は僅か3%にすぎません。しかし年齢層別にみると表2のように、実に77%までが小学生以下の年齢層です。

最近のプールは、構造上の欠陥のないように細心の注意が払われて作られており、プール自体の瑕疵によって事故が起こったという例は殆どありません。また監視員の配置も必要・十分な人員によってなされて事故防止に努めています。水死事故死の3/4が小学

生以下の年齢層であるこの現実に対し、監視のあり方だけでなく、小児やその同伴者の行動についても新たな視点から考え直してみる必要があると思います。

事故の実際例

プールが59年に開業して7年、この間に3回事故が起きました。①60年7月26日（金）10時50分頃6才の女兒、②62年8月19日（木）13時40分頃5才の男児、③平成2年7月16日（月）12時45分頃5才の男児の3例でいずれも救助され命は助かったのですが、この事故に共通した事柄を並べますと

- (1) 平日で、混雑している時間帯ではない。
- (2) ①は母親や町内会の人達と一緒に、②は両親兄弟4人揃って、③は幼稚園の団体が保母や母親が付添い入場している。
- (3) ①、②はスイミングスクールに通い、水に馴れ、水を恐がることもなく、また同伴者も子供のプール遊びに安心しきっている。
- (4) ①は近所の人に勧められ普段使っている浮き輪の代わりにビート板を友達から借りて水中に入り、②は昼食のため腰につけてい

表1 場所別水死者（警察庁）

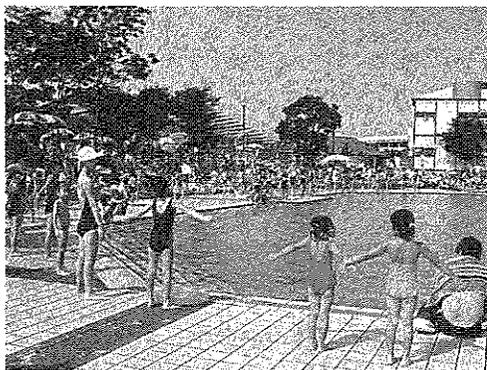
場 所	61. 6～8		元 6～8		2. 6～8	
	水死者	%	水死者	%	水死者	%
海	440	51	369	50	343	49
河 川	239	28	169	23	211	30
湖沼地	67	8	48	7	52	7
用水路	88	10	84	11	54	8
プール	30	3	22	3	21	3
その他	0	0	43	6	22	3
計	864	100	735	100	703	100

表2 年齢層別（61. 6～8）

年 令 層	水 死 者	%
小学生以下	23	77
中 学 生	4	13
高校生以上	3	10
計	30	100

（公園の管理No.2 伊 藤 堯）

安全の第1歩…準備体操



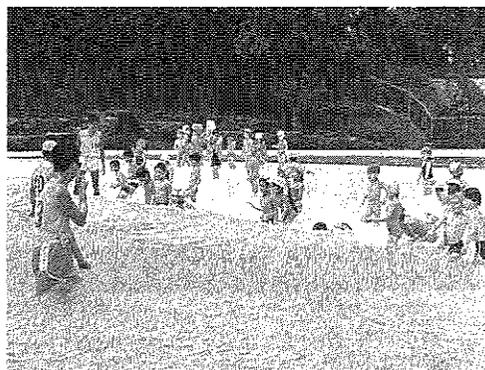
るヘルパーを母親が外し、食事が終わるや親の気付かぬ間にヘルパーもつけずに水に入り、③は腰につけたヘルパーが何かの理由で紐が緩んでいた。

(5) ①の場合プールの底からビート板がゆらゆらと浮上してきたので居合わせた中学生が不思議に思い水中を覗いて女兒を発見、②は子供づれの婦人の足にふれる物があり引き揚げ、③は腰のヘルパーは水面に浮いており、小児の頭は水中にあって、溺れかけているのを発見、直ちに水から引き揚げ3例とも職員、監視員が協力し人工呼吸や心臓マッサージを行い、救急車がくるまでにはいずれも息を吹き返し元気になっていた。

(6) ①、②とも病院に同伴した職員が名前を聞き出し、プールに連絡。場内放送によって事故は我が子の事であると知った。

以上が概要ですが、小児達は浮きさえあれば大丈夫と思いきんでおり、同伴者は子供の行動に殆ど注意をはらっていなかったことがわかります。以上の事例から監理する者も5～6才の小児の行動にはたとえ同伴者があっても特別な注意を払い、同伴者には監視人がいても注意を徹底させる必要があります。この3例が水死に至らなかったのは全くの幸運の連続であったと言って過言ではありません。

黄色いシャツの監視員はみんなのガードマン



事故防止対策

全国の公営大規模プールの視察から、参考になることは思い切って採用しました。

(1) 監視員とひとめで分かるように全員に黄色のシャツを着用させ、アルバイトには大きな背番号と名札を付けさせる。

(2) 50分遊泳の後10分間プールから上がらせ、休息を取らせる。

なお最も心懸けたのは職員とアルバイトの人間的な交わりを深くし、お互いが協力しあって事故防止につとめるという認識を、一刻もおろそかにしないように努めたことです。監視に死角が生じないように、人々が集中する場所は特に濃密に配置し、約100名の監視員をフルに動員しました。アルバイト間には「太陽が丘は気持ちがよい。楽しかった」という噂が流れ、アルバイト募集もそう苦労せずよい人々が集まりました。

夏の終わり

7月中旬から9月第1日曜日までの約50日間、連日の猛暑で真っ黒になってやっと最終日を迎えます。プール終了と同時に清掃も手際よく行き、6時には全員三々五々公園大食堂に集まってきます。服装を整え、軽くお化粧もし、見違えるばかりに華やいています。挨拶の終わるのを待ちかねたように乾杯が繰り返され、無事故で終わった60日間の苦労

が報われた喜びにひたっています。やがて元気のいい男子が音頭をとり「イッキ、イッキ」の大合唱が室内を圧倒し、嵐のような凄いエネルギーが爆発し、時間のたつのも忘れて続きます。8時半閉会を宣言してもなかなか静まらず去り難い風情です。「来年もよろしく

お願いします。」と職員と抱き合って別れを惜んでいる者がいます。夜の冷気が膚を爽やかに包み「あゝ、今年の夏もこれで終わった。」という満足感にひたりながら、足どりも軽く太陽が丘をおりて行きます。

(京都事務所 やまだ たいぞう)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

都市と田舎——二題

三 輪 泰 司

21 ふるさと京都塾

去る9月14日「21ふるさと京都塾」の設立総会が開催されました。

これは、農林水産省が、平成2年度から発足させた「農業農村活性化農業構造改善事業」を進める「農業農村活性化推進機構」のことです。中央でも「21世紀村づくり塾」というネーミングでよばれていて、その京都府レベルの組織の、いわば理事会の設立です。

塾委員会には、農業・農村の専門家もおられますが中小企業界や、私のように地域計画を専門とする、農業・農村には門外にあった者も加わっています。

この事業は、地域づくりを推進・支援するアドバイザーや仕掛け人を育てるソフト事業と、地域に根ざした独創的な技術導入や資源整備のハード事業からなっています。「塾」ですから人づくりとソフトウェアが柱となっており、一種の異業種交流でもあります。

「都市と農村の共生」はアルパックでも追求しているテーマです。ニュースレターで紹介していますように、所員達は、町や村で商工会や農村青年団体と一緒にあって、地場産品づくりやイベントに熱中しています。後継者問題など、都市の商店街や商工会議所が抱えている悩みも農村と同じだと思いました。

京都は都市と農村の共生にかけては、永い経験とノウハウを持っています。それは時代相に合わせて、姿が変わったり、姿が新しい価値を持ったりしてきています。

「商工会地域」が変わる時代です。この地域で未来に夢を持ち、毎日を楽しくしようと、自分達のビジョンをつくり、その推進に努力しているリーダーのために、お役に立ちたいと思います。

「仁王のむら」のこと

綾部の東部、奥上林に「仁王（におう）のむら」があります。綾部市の東部地区は、市域面積348.5km²の約53%を占めていますが、昭和60年の人口は6,515人で、全市人口の15.5%しかありません。その中で奥上林地区は1,038人。昭和30年の2,623人から、30年間で実に39.6%にまで減ってしまった過疎地の見本のような地区です。

「とにかく何かしなければ」と10人ほどの有志が“対話”を始めたのは、昭和57年の秋でした。仕事を終えて毎晩集まり、語り合い



ました。まず、ふるさとのことを知らせてもらおうと、地区内の話題を満載した手作りの「ふるさと通信」を地区内全戸に配るとともに、「ふるさとを忘れないで」との思いを込めて都会に出た地区出身者にも送りました。

反響が次第に高まり、58年夏に村民登録制度をつくり、59年5月に初の「ふるさと交流会」で“開村”しました。

地区にある国宝・光明寺仁王門にちなんで、「仁王のむら」と命名しました。今年も5月26～27日に、第7回交流会が開かれましたが、登録村民は、500人に達しています。愉快的な“むら憲法”もあり“むら役場”もあります。やまぶきの仁王煮・仁王の栗のマロンクッキーにすぎな茶などの産品、田植えに苺狩り、シンポジウムに朝市とイベントも多彩です。

「これで過疎がすぐにも解決できるとは思わないが、とにかくむらは立ち上がったのです」8月29日、京都・地域開発研究会の仲間との鮎狩り交流会での岩鼻長務むら代表の言葉です。（代表取締役会長 みわ ひろし）

花の文化園がオープンしました

高坂憲治

台風一過の晴天に恵まれて、9月22日、河内長野市に大阪府立花の文化園がオープンしました。

約10haの敷地の中で「花に学び」「花と交流する場」を基本方針としたこの施設は、植物園とは一味違って「花と人との関わりを理解する場」を目指しています。園を訪れた人々にきれいな花を眺めてもらうだけでなく、生活の中に花を活かすヒントを持ち帰ってもらえるように、パビリオン型の建築はできるだけ避けました。

南北に伸びる花の回廊を中心に、大装飾花壇や、花の工房、レストラン、イベントホー

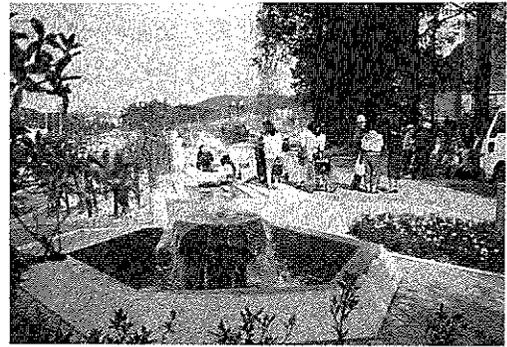
ル、センター棟、大温室、そして池や水の流れ、芝生広場をクラスター状に配置して、視点の変化に伴って、花や緑、水の揺々な姿や思いがけない姿を発見してもらえるように工夫しています。

花の工房では、花の料理や、図工、染色などの教室が開かれ、生活の中に花がもっと活

大装飾花壇



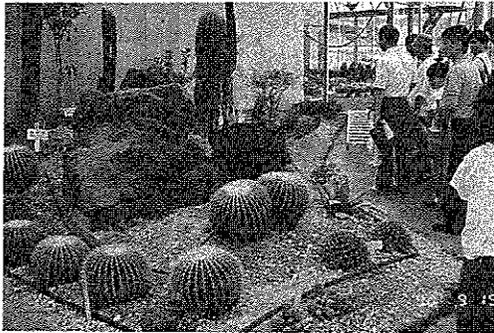
花の回廊と流れ



イベント広場とコロネード



砂漠の植物（乾燥温室）



かされるような試みもされます。

花の蕾をモチーフとした 2,000㎡の大温室には、熱帯植物の他に砂漠の植物（乾燥温室）や高山植物（冷室）が人々が訪れるのを待っています。

大装飾花壇や、花の回廊の両側に咲く花は全部で50,000株、季節の変化に応じて年4回植え替えられます。

現在、バラ園、ロックガーデンやコニファー園を中心とした2期工事の設計中です。

来年3月には花の文化園の全面オープンを、色とりどりに咲き乱れる花の便りと共にお届けしたいと思っています。

（大阪事務所 こうさか けんじ）

九州地域計画研究所主催 第20回地域ゼミ
「新たな飛行船の挑戦と可能性について」
山田 龍雄

地域ゼミ再開のお知らせ

様々な業種の人々との交流を通して地域のネットワークづくりと情報交換等を目的として昭和59～62年までの3年間にわたって開催してまいりました「地域ゼミ」を今年度より2ヶ月に1回程度を目途に再開することになりました。今年2回目のゼミ（第20回）では北九州工業大学の橋先生をお招きし、将来のコミューター航空としての可能性を秘めている飛行船の歴史、仕組みから始まり、今後の

利用方法、あるいは可能性等について幅広くお話をさせていただきました。

長時間空中停止が可能な長所を活かした様々な利用

先生の専門は「燃焼学」ですが、米国スタンフォード大学院で勉強している時に、飛行船狂いの牧師に出会ったことをきっかけに飛行船にのめり込んでいったとのことで、現在では、大学や企業の飛行船好きが集うブイアント懇談会（1973年創立、会員約200人）に所属されています。先生は今、直径4m程のドーム型をした天体観測用の飛行船を試作されており、最近第3号の実験飛行に成功されたとのことです。このように飛行船は空中に長時間停止することができ、その上エンジンの音が小さいということで、アメリカではゴルフ、大リーグの野球、500マイルの自動車レース等の実況中継に活躍しています。また、低空、低速で飛べるということで、大気汚染調査、救助・捜索活動、あるいは広域警備にも利用されています。韓国の全斗煥大統領が来日したおりに、警視庁の要請をうけて警備に活躍したとのことです。

遊覧飛行は1人当たり10万円程度

通勤用としての可能性ですが、飛んでいる最中みのコストでは、ヘリコプターに比べ安価ではありますが、飛行船運行量を拡大しないと、すぐにはコスト軽減につながらないということです。

例えば、現在、アサヒビールなどの商業飛行船が1年間契約で10億円であり、これを年間運行回数250日、40人乗り程度で考えると一人当たり10万円となり、なかなか高価なものとなります。

これは、常に地上で一緒に走行する要員がいること、また、悪天候で着陸するとき、多数の人手がいることなどの地上の方での経費

がかかるため、今のところどうしても高くなるということですが。

飛行船の実用化は技術的な開発と同時に、飛行船の様々な利用を行っていき、量の拡大を行い、地上面での効率化を行っていくことも重要のようです。

今後、地方都市間あるいは地方都市と田舎とを短時間で結ぶ有効な交通手段としてコミュニターの需要は増えてくるものと考えられますが、飛行船の利用の実用化に弾みをつけるのは、様々な利用を通じて飛行船利用の気運を盛り上げていくことのようにです。

(九州事務所 やまだ たつお)

地方での演劇祭－「誰でもお芝居が好きになる演劇祭」に参加して

若林秀和

この度、私の出身地広島県福山市郊外のみろくの里を舞台に、“みろくのさと国際演劇祭'90”が行われました。みろくの里は地元の常石造船が宗教的施設を持った研修・レクリエーション施設として整備を進めている場所で、当社も計画に協力しています。

演劇祭にはコーディネーターとして参加し、プロデューサーの紹介や演劇祭の基本コンセプトの設定協議、運営協力などを行いました。

基本目標は福山百万都市圏の生涯学習施設として、文化発信させることにありましたが、国際演劇祭として、また、地域に根ざした催事として確立させることも大きな目標です。昨年の第1回目はマニアックな構成で行われ、この反省を踏まえ、幅広い年齢層を対象に、様々なジャンルの劇団を集め、キャッチフレーズを「誰でもお芝居が好きになる演劇祭」、イメージキャラクターを親しみやすく「まねき猫」としました。

私は情宣活動を担当し、地元の大学関係者、

学生にも演劇祭を観劇していただこうと、限られた日数ではありましたが、お話しして回りました。全てにおいて初体験だったのですが、特にピラ配りは“まさかこんなことをするのは・・・”思ってもいませんでした。これも一助となったかどうかわかりませんが、演劇祭の方はスタッフの努力と、各劇団の熱演により、演劇にあまり馴染みの少ない地方都市福山において、一応成功裏に終わりました。

これを契機に演劇の華やかさ、楽しさを知っていただき、新しい備後の文化と人々の輪が少しでも広げられればと思っています。しかしまた、まちづくりに文化の必要性がよく言われますが、実際に参加して、地域の参加をつくりあげることの難しさを実感しました。今回、地元の市民劇場や劇団の運営協力を得られた事が今後の発展の糸口かと考えるしいです。

(大阪事務所 わかばやし ひでかず)

みろくのさと国際演劇祭'90のチラシ



まちを見直すー上町台地を巡るイベントー
畑 中 直 樹

秋分の日(9月23日)、阪大環境工学科盛岡研究室、大阪市環境部、大阪市環境科学研究所、アルパックなどの有志が中心となって、上町台地の坂道、緑、寺社を散策し、最後に四天王寺西門で夕日を眺めるというイベント『九輪の台地』を行いました。

上町台地は、大阪城の北端から住吉神社までの約2kmにわたる帯状の台地で、ここには、生国魂神社、四天王寺などの古い歴史をもった寺院、逢坂・天神坂・愛染坂・口縄坂などの坂、天王寺七名水で有名な湧水、台地西側斜面の寺社境内に残された緑など大阪市内には数少ない貴重な環境資源が多く残っています。しかし近年、湧水の多くが涸れ、ラブホテルやマンションが立ち並ぶなど、大阪の人にとって忘れられた存在になりつつあります。

そこで今回のイベントでは、生国魂神社に始まり四天王寺に至る9つの霊場(これがイベント名の由来、仏教では9という数字が特別な意味をもつらしい)を設け、途中、「太陽」「みどり」「みず」を楽しむコースを巡り、都心に残る貴重な空間を見直そうというものです。また、このイベントを秋分の日に行ったのは、この日の太陽が鳥居の真ん中に沈むように四天王寺西門を造った先人の、太陽すなわち自然に対する信仰を自分達でも体験しようという意味もあります。参加者には鈴を身につけてもらいその音を楽しんでもらったり、それぞれの霊場で朱印帳にスタンプを押していき、最後に1つの曼陀羅を完成させるなどの趣向も凝らしました。

この企画は、今年の「春分の日」に続いて2回目になります。残念ながら、今回はイベントのクライマックスである四天王寺西門の

中心に沈む太陽は雲に隠れて見えませんでした。が、地元の市民、JC、郷土史家の方など、前回の約70名をはるかに上回る約280名の参加を得るとともに、大阪女子学園に校舎の屋上を開放していただくなど、地元の方々の参加・協力の輪が着実に広がりつつあります。

(大阪事務所 はたなか なおき)

～快適な水辺環境を求めて～

「ため池文化フォーラム」のご案内

このたび、下記のような内容のフォーラムが開かれます。このフォーラムの趣旨は、従来、農業用利水にほぼ限定され、安全上の理由からフェンスなどにより隔離されることの多かった「ため池」について、住民自らの自発的な参加のもとに、地域のアメニティ、交流の場として多目的な利用へと発展させる方策を探るというものです。アルパックでも大阪府から受託した調査業務の一環としてお手伝いさせていただきます。

多くの方の参加をお待ちしております。

と き・・11月7日(水)午後1時～4時

ところ・・大阪国際交流センター1F大ホール)

内 容・・講演・講師＝浜村 淳

パネルディスカッション

安部大就 大阪府立大学教授

古賀英祐 近畿農政局建設部長

中谷三男 大阪府立大学名誉教授

鳴海邦碩 大阪大学助教授

盛岡 通 大阪大学助教授

森下郁子 (社)淡水生物研究所所長

参加方法・・当日受付、無料

<お問い合わせ>

○府耕地課ため池文化フォーラム担当
TEL 06-941-0351 (内線2773, 2774)

○地域計画・建築研究所 大阪事務所
重本幸彦、畑中直樹

新刊旧刊書評紹介

清水 義範著 講談社文庫 「蕎麦ときしめん」

紹介 伊坂善明

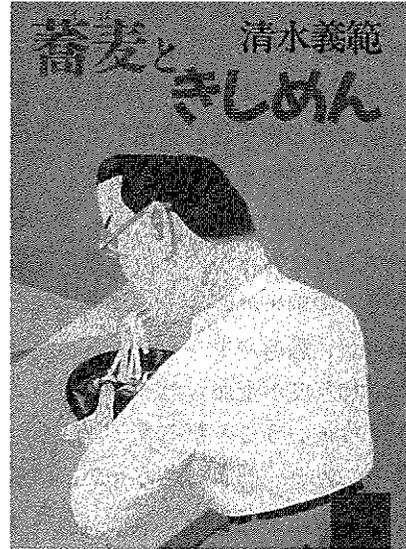
「日本人というのはおかしな国民で、日本人論を読むのが大好きである。それも外国人の書いたそれを特に喜ぶ。そういう本の中で、日本人は奇妙だ、特殊だ、つまらない国民だ、などと言われると大喜びで読み、その種の本はすべてベストセラーになる。かなりいいかげんなものでも、書いたのが外人であれば内容に疑いをさしはさまない。」と著者は書いている。そういわれれば、確かにそうだと思う。

この話は、何か東京について言われることとよく似ている。いわく東京は通勤地獄だ、もう住宅は一般人では買えない。それより地方のほうがずっといい。物価も安いし、住宅も持てる。自然にも親しめる。そう言いながら言っている人は東京に住み続けている。なんていうことがよくあるように思う。

この本は、名古屋という都市をとらえて大変ふまじめに書いている本である。以下にその一部を紹介すると・・・。

名古屋では、タクシーの運ちゃんが「中日なんていかんわ。選手がみんな馬鹿だで」と野球の話をもちかけても、けっして同意してはいけな。同意したとたんに、「こっから先は歩いてちょ」と降ろされる運命にあうという。東京人に対する見栄で、言う言葉と本心とは大いに違う名古屋人の特性。

また、名古屋では地下鉄で人の足を踏んづけても「すみません」と言っはならない。言ったとたんに、自分はよそ者だと公言したことになる。名古屋では、しらんぷりをするのがマナーであるという。それほど、名古屋



人は閉鎖的なコミュニケーションの中で生活して、よそ者を拒む性格があるという。

はては、東京の蕎麦と違い、汁の中にどっぷりとつかり、汁との接触面の大きい名古屋のきしめんは、いわば名古屋人の「個の喪失と社会への埋没」の象徴であるとまでいう。

名古屋の人が読んだら頭に来るにちがいないほど、独断と偏見で書かれたフィクションではある。しかし、この本がけっこう名古屋の人に受けたと聞く。結果として、名古屋の人と都市をとらえて、冒頭の日本人の特殊論を擬似的に描くといったことに成功している。

また、一つの都市を取り上げて、その特性を分析する時、こういう見方もおもしろいかも知れない。ばかばかしいけど読み終わると「何か」考えさせられる本である。軽い気持ちで、一度読んで見て下さい。

(京都事務所 いさか よしあき)

まちかど

都会に住めない恐竜の話

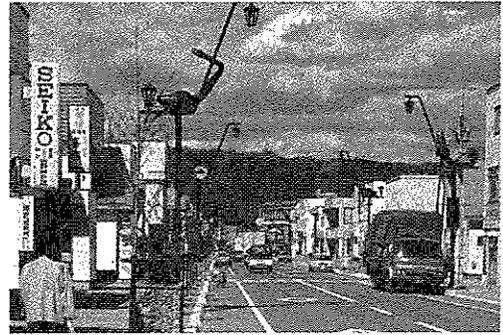
鶴 飼 奈 弓

「あれは何だ？」我々の車は夕張から日高に向かってホッカイドウの大自然の中の道道（都道府県道）を走っていたのだが、突然視界が開けたかと思うと、整備したての街路の空にいきなり恐竜を発見したのだ。

“ホベツクビナガリュウ”という名を聞いたことがあるだろうか。人口5千人弱のここ穂別町は、穂別米の産地として地元では知られていたが、恐竜やアンモナイトの化石が出ることで知名度が上がった。それを町おこしに活かそうということだろうか。

FRPにカラー塗装であろうか、結構大きくてももちろん特注品なのでお金もかかっているであろう。そして沿道の民家や商店をよくみると、そこそこに仲間達が顔を出している。実はここは、道道の別ルートバイパス設置に危機を感じ、沿道商店街が現道の拡幅を願い出て積極的に用地買収に応じたもので、そればかりか逆にこの機会に活性化しようと建築協定をむすび、デザインや色、セットバックを統一、各々の商店主が自ら店のCI・改装に取り組んで、官民共同で整備を進めたも

「進化の道」地球の誕生ゾーン



のであった。さらにはストリートファニチャーや街路樹の清掃・管理や除雪も組合で行うこととしている。冒頭の街灯のデザインも役場で考案したオリジナルである。

街のもつ特色をどんどん壊して画一化しつつある都会では見られないこだわりと熱心さである。同行者のうち東京で建築のハードに関わっている人間の感想はあまり好意的ではなかったが、フツウの人は面白がって見ていた。だが、地方の地域おこしを都会の視点や感性で評価するということにどれ程の意味があるのだろうか。日本中のあちこちで、地域の祈りやら思いやら必要性やらがカタチになっているとしたら、我々はそれを、洗練されているか、オシャレか、トレンドか、で判定してしまっていないだろうか。

(京都事務所 うかい なゆみ)

アルパック (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本 都 事 務 所	☎600	京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代) FAX (075) 256-1764
大 阪 事 務 所	☎540	大阪市中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06) 942-5732(代) FAX (06) 941-7478
名 古 屋 事 務 所	☎460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052) 962-1224(代) FAX (052) 962-1225
東 京 事 務 所	☎160	東京都新宿区新宿2-5-16 (霞ビル401号)	TEL (03) 226-9130(代) FAX (03) 226-9560
九 州 地 域 計 画 研 究 所	☎810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代) FAX (092) 731-7673
(株)アルパックインターナショナル	☎540	大阪市中央区石町1丁目1番1号 (天満橋千代田ビル2号館9階)	TEL (06) 943-7016 FAX (06) 943-7026
(株)都市居住文化研究所	☎604	京都市中京区御池通東洞院東南角 (京ビル4階)	TEL (075) 252-2231 FAX (075) 252-2282